元院長からの励まし

私の辞職に際し、当ＨＰ（辞職挨拶）で触れさせていただいた元院長先生から、下記のお言葉をいただきました。
こうした暖かい目で我々指導員を見守っていてくださったことに、改めて感謝に堪えません。また、今後の重症児問題の示唆と励ましをいただき、皆さんの更なるご指導とご協力をお願いいたしたく、私信からの引用はなすべきでないとは思いますが、抜粋・記載させていただきました。

『　３５年間、ごくろう様でした。

……。

重症児も社会（人類）にとってかけがえのない存在であることを世間に知らせてきた功績の可成（どの位かわかりませんが、本当は 80 ～ 90 ％）のものが、国療といわれた施設で一生懸命、口角泡を飛ばしていた、指導員と称する、不思議な職種の若者たちの手（心）によることは、実際に見た私が知っています。

発達しない、どうにもならない子どもではなく、発達の可能性のある子どもたち、そして教育の可能性、人を幸せにする可能性まで存在することが、だんだん世間に知られるようになりました。みんな阿部さんたちの功績です。
でも本番はこれからかも知れません。知っていること、それにふさわしい処遇を受けているのとはまだ一致していませんから。でも方向はしっかり見出されましたから、みんなで頑張ってまいりましょう。

……。

折々の生き様、考え方をしっかり本にまとめられてあるから、後輩の役にも立つことと思います。阿部さんならではの生き方（業績）だったと思います。

……。

これからが第一線です。がんばって下さい。重症児はゆっくりがんばるのが好きなようですから、今度はいそがないでやってまいりましょう。　』

（2002 年 04 月 14 日　記）